国内研修報告書

・テーマ：徳島県 海陽町における 地域での防災活動の取り組みについて

・研修先：徳島県海陽町

・期間：2024 年 8 月 7 日～8 日

・参加人数：4 人

国内研修報告書

今回私たちは８月７日から８月９日の３日間（移動を含む）で徳島県に研修に行かせていただきました。私が今回この研修に参加した理由として私の地元は富士山が近くにあり、噴火が懸念されています。また巨大地震である南海トラフ地震が全国的に懸念されている今、防災について学ぶ必要性を感じました。またコミュニティについて考えていく中で現在、地域の問題として高齢化が１つの課題として挙げられています。この問題において最近多くなってきているケースは１人世帯の高齢者です。この問題がある今、大きな災害が起こってしまったら、避難が遅れてしまう人が多く生まれてしまうと考えます。そのような人をなくすためには、町内会や自治会などコミュニティでの支え合いが必要不可欠であり、それに加えて地域住民一人ひとりの防災への意識が重要だと思います。防災への意識を高めるためにはどうするべきか、また防災に向けて私たちに今できること、やるべきことは何かを考えることが必要だと思いました。その上で国内研修での体験を今後の大学生活や私生活に活かしていきたいと思い、参加させていただきました。

まず１日目は夜行バスで徳島県へ移動したため、２日目の午後に徳島市にある東部防災館おきのすインドアパークへ訪問し、お話を伺い、施設を見学させていただきました。この施設は普段は自分の可能性に気づく場所というコンセプトのもとスポーツやレクリエーションをすることのできるスペース、講演会や交流会、徳島県ならではの阿波踊りの練習などを行うカルチャーイベントがある複合型のスポーツ・体験施設であり、また学童の役割も担っている施設でありながら、災害時には全国から届く支援物資を集積し、被災地へ配送する物資輸送拠点地でもある二面性をもった施設です。普段のこの施設の利用者の年齢層の幅はとても広く家族連れで来られる方や子育て世代の方、小学生から高校生などと年齢関係なく、たくさんの人が利用されていました。私たちが伺ったのは昼間でしたが、夜には社会人の方々も利用されるそうです。また利用者はこの施設が災害時には物資輸送拠点として機能し、防災に努めていることを認知して利用しているのか、認知せず利用しているのかという疑問を持ち質問させていただいたところ、具体的な調査はしたことがないが、この施設のホームページでは防災についてあまり掲載されていません。そのためこの施設の利用者はみんなで交流する場、楽しむ場であると解釈しており、防災という意識はあまりないと思われるそうです。この話を聞いて、利用者にこの施設に対するイメージに防災があまりないという部分で、防災をいかにも強調してしまうのは逆に強制されてい

る、受け身の形になってしまって、逆効果になってしまうのかもしれないと思いました。この施設は防災を強調していない中でも、施設を見学している中で、防災のチラシが置いてあるところがあったり、避難経路の地図がさまざまな場所に設置されていたりと利用者が施設を使用する中で防災に自然に目がいくようになっていると思いました。防災は日常から取り入れていくことが大切なのではないかと施設を見学していく中で思いました。また施設を利用している方々はみんな笑顔でとてもいい雰囲気でした。この施設は利用者の方々にとって居心地の良い場所なのだと感じました。

3日目は本来、徳島県の海陽町の役所を訪問し、お話を伺う予定でしたが、8月8日の午後に宮崎県で大きな地震が起こり、その影響により、南海トラフ地震臨時情報が発表されました。それにより、沿岸部に位置する海陽町へ行くことが困難になり、役所の方に直接お話を聞くことができませんでしたが、海陽町の方のご厚意により、後日、日を改めて、Zoomを通してお話を伺うことができました。私たちは海陽町の宍喰中学校で2013年に行われた防災キャンプという若者を主な対象とする防災イベントを行っていたことを知り、珍しく思い、また災害が起きたとき、高齢化という問題を抱える地域はみんなで協力して、避難することが必要であると考えると、地域の若者の存在は非常に重要であると感じました。そういった部分で興味を持ち、今回お話を伺わせていただきました。この防災キャンプは地域に伝承される津波の被災の歴史を再確認し、防災意識を高め、防災の実践的な知識やスキルを身につけること、また避難所生活を中学生が体験し、避難所や地域防災のあり方について考える機会をつくり、学習成果とつなげ、将来の地域防災において中心的な役割を果たせるようにすることを目的としています。この活動は2泊3日で行われており、具体的な活動内容として防災訓練はもちろん、起震車体験や避難所、就寝場所の設営などが挙げられます。その他にも、食事の際、実際に非常食を食べることもおこなっており、実際に災害が起こったときの避難をしているときをイメージすることができる貴重な活動だと思いました。またこの活動に参加した中学生は避難所での生活が想像以上にストレスが溜まることやライトやラジオが役に立つことなど実際に災害が起こったときにわかることを実感することができている感想が多く、この防災キャンプという活動は将来のためになるものであり、さまざまな災害が懸念されている今、このような活動をたくさんの地域で行う必要性を感じました。またほとんどの学校では防災訓練というものが実施されていますが、教室からグラウンドへの避難など非常に短いものばかりであまり、実際に起こったときのことは想像しにくいと思います。だからこそこの活動のように2泊3日といった時間を防災訓練に使うことで災害が起こったときの生活を想像することができ、防災意識が高まるのではないかと思いました。

今回の国内研修を通して、防災活動の行い方や防災の啓発方法はさまざまであるが、普段の生活の中で防災を意識させる工夫や災害時を想像しやすい防災訓練を行うこと、若者に防災について考えさせる機会をつくることが必要であることを学びました。また今回は研修中に南海トラフ地震臨時情報が発表された時、幸い警報だけですみましたが、災害は突然起こるものということ、誰もが被害者になり得るとても恐ろしいものだと改めて感じ、自分自身、災害への危機感を持っていたようで持っていなかったことに気づかされました。それと同時に、災害は危険という認識はあってもどこかで自分は大丈夫と思ってしまっている人が多いかもしれないと思いました。だからこそ、実際の災害をイメージすることのできる活動をすることが災害への危機感、そして防災意識を高めることができると思いました。今の私にできることは、防災について考え続けることだと思います。今後は今回の国内研修で得たものを活かすとともに、地域についてより詳しく学び、得た知識と結びつけて、地域の防災について考えていきたいと思います。また地域の防災について考えていく中で、そこに住んでいる地域住民に向けた防災の啓発活動や防災訓練はもちろん大切ですが、その地域についてほとんど何も知らない観光客が災害に遭遇してしまう場合もあると思います。そこへの対策もこれから考えていきたいと思いました。

今回の研修に協力してくださった皆様、貴重なお話をありがとうございました。